

一皮膚に光をあてる一

川田 暁

近畿大学名誉教授

はじめに

私の専門は光生物学である。紫外線による慢性障害の光老化の予防、乾癬に対する紫外線療法、レーザーやIPLなどの光治療、と「光と皮膚」をテーマに仕事をしてきた。1979年に東京医科歯科大学を卒業してから2021年に近畿大学(以下、近大)を定年退職するまでの間、4つの大学と2つの市中病院に勤務した。この42年間私が歩んだ道に「光をあてて」振り返ってみたい。

I. 東京医科歯科大学時代(1979~1987年)

大学の6年生の春ごろに皮膚科への入局を決めた。手術にも興味があったためマイナー外科系の皮膚科、整形外科、泌尿器科が最終候補となった。その中で膠原病など内科的要素もあることと医局の雰囲気が家庭的でよかったことで、皮膚科に決めた。

入局後は主に処置室で注射、生検、小手術、処置をさせてもらった。とくに2年目は入局者がなく、同期がローテートに出たため、通常よりもたくさんの仕事をさせてもらい、先輩に指導してもらった。皮膚科診療の基本技術が身についた貴重な経験であった。

外来で診断がむずかしい初診患者さんが来院されると医局員全員に集合がかり、診察室でカンファレンス(以下、カンファ)が開かれた。その皮膚症状をみさせていただき、自分なりの診断を考えた。そこで当時の香川三郎教授が各医局員に診断を尋ねた。私も向こう見ずに自分の診断を述べたが、しばしば間違えた。このカンファは近大時代にも継続した。医局会の際には病理カンファがあった。若手は事前に当てられた症例のプレパラートをみておき、Leverの教科書で勉強し、カンファで所見と診断をプレゼンする。ここでも自信満々にプレゼンしたところ、非常勤講師の山田実先生に全否定されたことをよく覚えている。

ローテートから大学に戻ってしばらくしたら、当時助教授の佐藤吉昭先生に光の研究をしないかと誘わ

れた。興味をもっていた分野だったので、迷わず「光グループ」に入った。当時の光グループの研究テーマは、色素性乾皮症と正常人の紫外線に対する感受性の2つであった。私は後者をやるようにといわれた。まず屋外実験でサンスクリーン剤の効果を確認するという実験を3回ほど、夏休みに下田海岸でやった。その後学位のテーマとして、日本人のUVBによる紅斑と遅延型色素沈着、UVAによる即時型色素沈着について、モノクロメーター(単色光を照射する装置)を用いて実験をした。幸いその結果を『Photodermatology (現・Photodermatology Photoimmunology Photomedicine)』に掲載できた。ただヒトを対象とした基礎研究はいろいろな面で苦労が多かった。皮膚科の光の研究者が集まるUVABCclubという研究会で発表し、多くの議論を通じて刺激を受けた(図1)。

II. 関連病院での勤務 (1981~1983年, 1987年)

入局後3年目と4年目の2年間、中野総合病院(現・新渡戸記念中野総合病院)に勤務した。上司は部長の入交敏勝先生であった。毎日外来と入院診療をすることで、患者さんの皮疹の推移を確認することができた。入交先生の診察の仕方、所見の取り方、診断・治療技術をあまねく修得させてもらった。私の臨床力の原点といえる。入交先生は当時市場に出たばかりのマイコンピュータ(シャープMZシリーズ)(図2)を導入し、プログラムを自ら作り、診断・組織などのデータベースを作った。私もこのときからコンピュータに親しむことができた。

1987年に2つ目の病院である総合病院・取手協同病院(現・JAとりで総合医療センター)に異動した。上司は光グループでも指導していただいた部長の御藤良裕先生であった。中野総合病院は都会の病院であったが、今度は田園地帯の病院である。患者さんの気質



図1 1983年8月、六甲オリエンタルホテルで開催されたUVABClubの集合写真
高名な先生がたくさん参加されました。読者のみなさん、わかりますか? (筆者は上段左から5人目)

ものんびりで、皮膚疾患も都会とは違い、とても勉強になり臨床力がパワーアップできた。

Ⅲ. 防衛医科大学校時代(1988~1997年)

取手にいたときに、医局の先輩の比留間政太郎先生[当時、防衛医科大学校(以下、防衛医大)講師]から防衛医大で働いてみないかと誘われた。自分に大学人としてやれる能力があるのか、所沢という新しい土地になじめるのかなど多くの不安があった。しかし新たなことに挑戦してみたいと思い、決断した。赴任したときの教授は東京大学(以下、東大)を定年退官された久木田淳先生であった。久木田先生の国際学会や日本皮膚科学会でのプレゼンスの偉大さにびっくりした。比留間先生には一般臨床と真菌について多くのことを教えていただき、私の臨床の得意分野を拡げることができた。次に教授に昇格された石橋明先生は「単純ヘルペス感染後の多型浸出性紅斑」や「うっ滞性脂肪織炎」など新たな疾患概念を発表され、真の臨床家というのはこのように皮膚疾患を発見するのだと畏敬の念を覚えた。その後、助教授として多島新吾先生が赴任された。多島先生はエラスチンの基礎研究に没頭されており、研究についてのディスカッションを通じて研究者の真髄というものを教えていただいた。

私自身は「紫外線予防の研究」を継続し、さらに多数

の「光線過敏症」の症例研究を論文として発表できた。1990年に母校の東京医科歯科大学の皮膚科教授に西岡清先生が就任された。私が進路に迷うたびにご助言いただき、正しい方向に導いてくださった。

Ⅳ. UCSFへの留学(1990~1992年)

防衛医大で仕事をしているときに、当時東大教授の石橋康正先生からUCSF(カリフォルニア大学サンフランシスコ校)への留学のお話をいただいた。前々から海外留学したいと思っていたこと、当時の35歳という年齢はラストチャンスと考えたことから即断した。



図2 1981年、中野総合病院時代の筆者



図3 1992年, UCSFのラボのメンバーと。左手前が高原英成先生

留学先は服山公江先生のラボであった(図3)。ヒトが対象でない基礎研究ができると期待に胸が膨らんだ。研究テーマはラット皮膚から抽出したhistidine-rich protein (filaggrin) の抗ウイルス活性の研究であった。実験は思ったよりもたいへんなものであった。まず生化学の基礎知識がないのに、液体クロマトグラフィー・電気泳動・免疫ブロットを見よう見まねで始めた。数多くの実験に失敗し、成果がなかなか出なかった。やっと出た結果で投稿しようとしたが、服山先生から許可が下りず結局論文にならなかった。ただこのときに同じラボで指導いただいた2人の先生に出会えたことは僥倖であった。長崎大学水産学部の原研治先生と茨城大学農学部の高原英成先生である。両先生とは帰国後に共同研究をさせてもらい、数多くの基礎研究の論文を出すことができた。

V. 帝京大学医学部附属市原病院時代 (1997~1999年)

防衛医大とUCSFで心ゆくまで研究三昧をしたため、そろそろ市中病院に移り臨床のみをやろうかと考えていた。そこに当時帝京大学医学部附属市原病院(以下、帝京大市原病院)の教授の松尾聿朗先生と帝京大学教授の高橋久先生から帝京大市原病院に来ないかというお誘いを受けた。これは私に大学での仕事を継続しろという神の声だと思い決断した。平日は市原の借家、週末は所沢の自宅を高速道路で行き来した。初めて助教授室という個室を与えられ、感激した。

ここは医局員は10人不足というこじんまりした医局であり、中間管理職として医局のマネジメントや医局員の論文指導を勉強することができた。また松尾先生はUVABClubでの大先輩であり、「光の基礎研究」や「ポルフィリン症」について基礎・臨床研究をすることができた。

VI. 近畿大学時代(1999~2021年)

帝京大市原病院での仕事に慣れてきたころに、当時近大教授の手塚正先生に、近大に助教授として赴任しないかと誘っていただいた。このときは悩んだ。大きい医局でやっていけるのだろうか、大阪で暮らしていけるのだろうか、などとさまざまな思いが去就した。人生最後の挑戦であり、結果を考えず行ってみようと思ひ、妻も賛成してくれたため、決断した。

助教授としての5年間で、臨床では手塚先生の専門であるレーザー治療を教えていただき、美容皮膚科の診療と研究を始めた。これが2014年の日本美容皮膚科学会理事長就任へつながったと思う。また手塚先生が日本乾癬学会の理事長に就任されたので事務局長を務めた。そこで学会運営について学び、さらに私も2017年に乾癬学会の理事長を経験することができた。

運よく主任教授に就任した直後から、多数の医局員が去ってしまい、やはり10人不足の小さな医局になってしまった。今度は最終責任者としてたいへん苦労した。週に5回外来で初診を担当し、入院患者さんもできるかぎり主治医と一緒に診察した。その後



図4 2020年6月, 医局集合写真

多くの新入医局員があり, 徐々に落ち着き私の外来も週2回になった(図4, 5).

研究面では光線過敏症の1つである骨髄性プロトポルフィリン症の診断と予防に注力し, 厚生労働科学研究の難治性疾患克服研究事業のポルフィリン症研究班の班員と研究代表者を務めた. 茨城大学の高原教授との脱イミノ化酵素の基礎研究, 准教授の大磯直毅先生の色素異常症, 准教授の遠藤英樹先生のレーザーの臨床研究などが開花した. 大学内では学術運営部長, 看

護学校長, 社会活動としては社会保険診療報酬支払基金の審査委員, 雑誌『皮膚の科学』の編集長などを務めた. 2011年に26回日本乾癬学会, 2018年に第69回日本皮膚科学会中部支部学術大会と第1回日本フォトダーマトロジー学会を開催した. 海外の学会にも多数回出張した. 数えてみると17カ国を歴訪した.

この42年間を駆け足で振り返ってみると, 上司, 同僚, 歴代医局員, 秘書の多くの方々に助けていただいた. ここに改めて感謝申し上げたい.

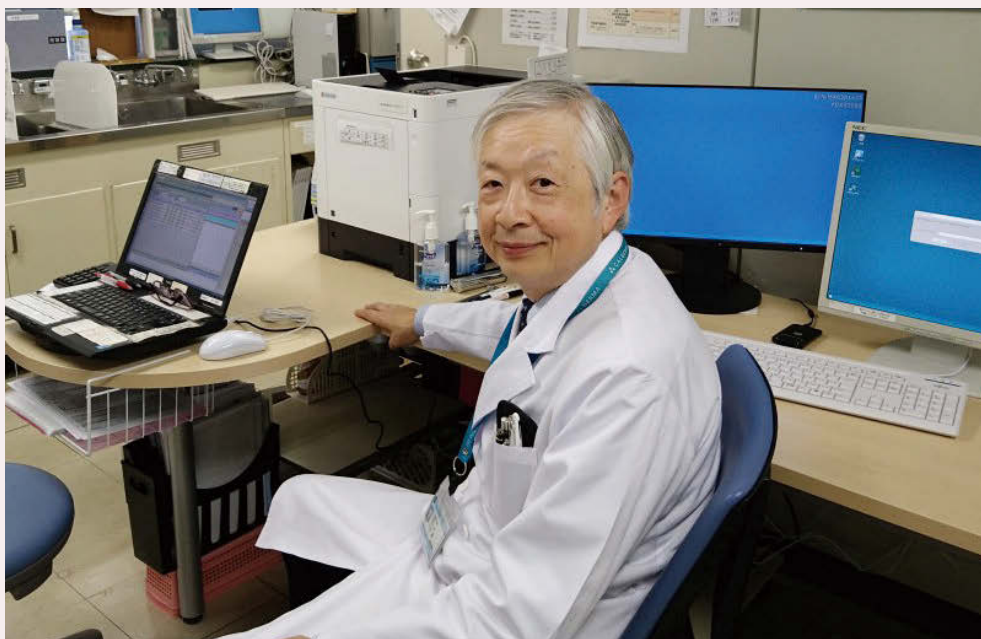


図5 2021年2月, 皮膚科外来の診察室での筆者